



叢話錄

卷二





古歌  
川邊石見中井村のしんみり  
おもしろいものさあ  
。或人のおぼろげ

雲英文庫

個人研究費  
雲英末雄  
58- 2044



古歌

川石花井井花のこころを  
おのころのこころを

。或人のおぼろげ

智のゆきまらぬ世の  
村徑

。河内下村

大新禪寺経花北の山と谷

そ秋の満つて  
除き

松涛社

花のつれづれに  
花の森

。五秋

或人句

吹雪の樹々  
桐の葉の

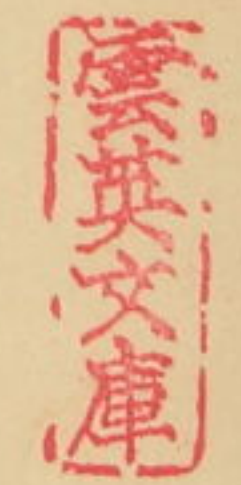
群て云初と、ぬもふまをさめて

一白石絶え又立花のこころを  
樹々

一又は吹雪の地をく  
葉

吹雪の留の葉を  
押お

不限仮名に十七字とも  
し





極道の別傳口述百奇集

吹まよふ世のさびしき秋の  
うらみもゆるん人なりぬるの  
吹まよふ百吹乱事たつとまよふ  
菊もこころかやこ疑ひとまよふ  
の留ま味背こころ口傳あり

○五條

邑名

桐の世をいふ御供の  
右の世をいふ先づの世

右の世をいふ先づの世

初條

多

月あまたしき世の世をいふ

七夕の年稀齡中なる

多

七つの子の世をいふ

○七つの子

作者

点丸又きり  
つらつら此の世をいふ

名月

村名

入おみ遊了の世をいふ

庚子

冬毎内

多

白河州口下村

名月











○後のあひだをきくは光

山

たつたは長年盤橋を初よの歌

秋のつれとさきつれも先住た

十露盤橋は金城の伝ゆら

岩國の錦帯橋はみり川に掛り

みきし帯は云々として号し

此くも俗十露の盤橋は

橋はしと凡そは年程の粒力

くく細くはく十露盤橋

くくおまは海帯

一九月十之夜の月を歌ふは漢土

として文も不見日切めて

菅原相宗府の九月十之夜の月を

月々の詩めははくはらとるもの如源氏

物伝ふも九月十之夜の月を

夕雲れはさし十之夜の歌

之代集より月夕雲れは九月の

比夕雲の大将小節より

の月乃いそ花やみり山あまは小倉の山も

たら向ふははらとるははらとるははらとる

月びりてははらとるははらとるははらとる

九月十之夜の月を

秋の月からみりてははらとるははらとる

こよい一あはらとるははらとるははらとる



此より中華ふるまふはらわんゆへに  
和の氣がまわつてはるまじく  
身こゝろ

。雪夜又月見せんも或人の身

振ふるりて

村住

お枯しきりも菊は月

郷會も借も浮や推抄も合あり

○因州坂上瓜下多人こゝろてあそびも

訪ひのあそび上落たもさるる女乃こひ

か換乃かり一旅はいいさ可かなり

瓜子谷御秘苑日暮に招せて梅の月

此句をあののやうに傳へむやハ梅の月

をいふは海はいはるる我もいはるる

心ゆく志し一斗白の換切はらぬ人

の詠へ梅の月を傳へ斗はその換らぬ

一斗白結は中ころにて切らぬは

梅の月も梅の月もはるるははるるは

倒たへるははるるの換はらぬ

石切しては語のり換はて候はらぬ  
お追おく候はらぬ

○うら留う押おのお又あ字じ二には

合あてり作例しは



の語... 中... 接... 倒... 作

右切して... 接... 倒...

〇... 押... 含... 旅行...

子

〇... 〇...

〇... 〇...

蝶... 〇...

〇... 〇...

〇... 〇...

〇... 〇...

〇... 〇...

〇... 〇...

鬼貫







かたがたの鐘を連きの時を  
村徑

かたがたの鐘を連きの時を  
村徑

半時庵の洋目忌日一軸掛の向

寒の菊や花の影のこに下りて  
空

かたがたの鐘を連きの時を  
村徑

初少

かたがたの鐘を連きの時を  
村徑

かたがたの鐘を連きの時を  
村徑

國産一品とあるかたがたの  
華飾の真千代の

かたがたの鐘を連きの時を  
村徑

坂上  
坂下

かたがたの鐘を連きの時を  
村徑

古也、字つりこ十八子亦也

かたがたの鐘を連きの時を  
村徑

此句外にひびき云集千代

かたがたの鐘を連きの時を  
村徑

此句外にひびき云集千代

かたがたの鐘を連きの時を  
村徑







安永九庚子年十一月  
當日賀正早可送如  
方々故厚与之延戸  
あり其自画乃一多と

愚画梅と半と

竹と梅と一画素稿の梅  
答の梅と半と

早川湾舟の乃ト古じ賀正

此冬は霜雪  
田置乃粉

七子家村  
画書

列

○寒きくの花と自画

寒菊の花咲つる  
村

○阿久らり素柏河  
各句合

作  
不  
知

中あり世をなす  
柳

山あり世をなす  
柳

山あり世をなす  
柳

山あり世をなす  
柳











○ 飄然翁八旬の玉海に遊く健翁  
身長の齡はさるに海干地上の儂より  
と一友人とて藜乃杖と進出  
此翁は狂翁に謝とて一儂  
此一首と

活きても人のなきはかり  
くうらゝさる杖と道は杖  
あ杖室  
活言

○ 一滯と入るは月夜自其歌中の寫一卷  
を傳う傳へる物或は方々へも  
自筆は書とて一書とて契り

廣くはるる年々くくく  
河の流るるしるる  
色はるる

あふるる書とてはるる  
七々  
村傳

糸下

○ 郊外 文

水は枯るる  
瓜下

庚



冬の心は... 冬は...

七子雙村徑

糸下

○郊外夕照

雪の積り... 丘下

庚子九月

雪の下... 村徑

寒月也... 一廬

○人女神詠切題及句

梅の花... 夷柏... 村々... 洞礎... 魚亮... 氷儿... 右五子魚亮秘藏の一軸捧納



寒月おきしつる岩の水  
夷柏

寒月おきしつる岩の松  
松清社

寒月おきしつる岩の菊  
菊友

寒月おきしつる岩の柳  
柳友

寒月おきしつる岩の梅  
梅友

○信しつる岩の梅

信しつる岩の梅  
加武

○安永十年正月 八千坊歳旦入集

お書光俊正朝お吟

梅のつぼみ  
七十七の岩の梅  
村佐

嶺の岩  
七十七の岩の梅

娘のつぼみ  
七十七の岩の梅

香木井

香保能母まきしつる柳

右に香木井のつぼみ  
夷柏のつぼみ



東門外に於て... 東門外に於て...

歳暮

七十の言を編みし

娘... 婿... 婿... 婿...

冬 木井

曙 保能母... 生... 柳... 七本

右に... 思... 別記

歳旦

元... 八千坊 夷柏

... 谷間... 東門 金芽

... 東門 金芽

... 夷柏

... 夷柏

... 夷柏

... 夷柏

... 夷柏

... 夷柏

... 夷柏



去魚

愛ゆきし大原ゆきし

夷柏

魚

和名魚人しむす台一字類

魚亮

弟二句

土龜 くるしむる魚

蝶一つおらかくらうり大三十日

去魚

五神ゆきしる解しる

魚

長飲のしもいづく代園ゆき

氷儿

魚

ましくおらゆきし離て一泊

魚

愛ゆきし時季のおら

市原寺けしる魚

魚

桂てんる魚のましくおら

魚柳

魚

あしゆきし魚のましくおら

魚



市原寺にけりし宿に梅の花

果旦

桂をくつる年のまじりけりしや

忍柳

ちのち

あはれにさかすかたの夢

去来

穴一ふ先づける梅の秋仁茂

果旦

花の春中少極きて唯あき梨

年の名

春船

掛乞や加茂の川念山法師

年指

魚亮

誰しもをむねに乳字に田植の法

歳旦のラキ句可

之もり穴くしも初来風

去来句

夢に神楽孤村り去小袖ひらて

楳小弓遊し玉そ睦月かた

諸一門を名にあらは土大根

是所の男わくくまをくまの那

鱈城

待香くもくまをくまの那

菜尺

此ののちあはれにうらみあり、相違はらう換の辺  
舟の今に之あり、再通信の、終りけり



果来

花より定家のみちのりも花より花八千坊

因品の招物の追加

御康和

奥珍より管の事いりや 釣斗竹 魚亮

冬至

梅宮より了信の至陽の如く 改珠

人日 七十一乃去は定

七久造也日本一派農於喜鼓 村徑

撫杵雅君の半元振奉賀

梅の自画

今や生とえ 梅もそは梅乃足

二月花号 花号の所市殿

向つては若人をも花ひさし 梅

歳旦

凌山舎

かゝ夜の望を音と一 所は云 龜馬

外東より東の黒谷水尚哉

中二支はちや 晴くまふ 介風

海光のまゝに都古の船のり 梅牙

山より夜をまじり 晴りのまに京

志 梅丹より 乾く鳥帽子哉

吉命舎

佳友



かゝる夜の望み昔も一紙の云 亀亭  
あまの夜をよみしとて 谷あふ成  
十二支あちや 晴くまの風

湯光野を先づ都中の船のり 山城 梅牙

山も夜をよみしとて 晴くまの風

志興 梅牙のるる 花乾く鳥帽子哉

吉命舎 佳友

ふいふ書きの初候 けり 寒く山寺

身前の年れをり 妙く又夫に大いの二とあま

良室の和言 内ふる言 訪ひし けり 六花

大命 魯珪

冥加あまの日は 又 謝親 福十 壽 卒

石室

いつと方ら けり 居る 極の年つ

義陵

歳喚 玉のり

魚の陸

舟の去日 春の行 けり 家 康 乃 原

志興 舟の去日 春の行 けり 家 康 乃 原

梅もあまの夜をよみしとて 晴くまの風

村匠

何あまの夜をよみしとて 晴くまの風

○廿月二日 終るる 舟のり

立

待望の日は 身を けり 眠る 春のり



○或人の色なり

樹の如くもあはれも鬼瓦

此の春色はむかしもあはれも  
二句実の虚も此の雑干  
あはれも樹の如くもあはれも鬼瓦  
あはれもあはれもあはれもあはれも  
豊かあはれもあはれもあはれも  
尺もあはれもあはれもあはれも  
景情もあはれもあはれもあはれも  
福也慶利

弘法大師

高のころあはれもあはれもあはれも  
あはれもあはれもあはれもあはれも

雑ノ奈ノ日ノ事ハ  
由ニ衣掛ニ事

我が心は花の如く

村徑

右雑詩の句は本海社より弘法  
大師の雑詩の句は弘法より  
近平より其の句は弘法より

歳旦

本海社

おのころの御印は玉鏡

洞礎

今一編の意の骨探搜

村徑



石... 大師の御所の...  
五...  
[...]

歳旦

李海社

おし魔く御印は玉鏡

佃礎

今一知とての身探搜

村徑

あまの山とてい花の峰子多

半坊

山をたどりて積築あまの

新しき人そま

つとめ探ハ世

そとめ探ハ世

かこ名留め世

山

五十

福壽阿い

南畝

甚良

かこ折く

全



如月半の奥高き事あり  
名を伝へしものこと  
ともしいのみ  
村徑

景物乃土筆大にけく二扉を  
土

徳室、推移の  
土

必くしやまふ人福い事乃  
何きし  
土

大佛の  
土筆の  
土

行りし世まぶ小佛の  
土

佛威  
土筆の  
土

土筆 奥高き人  
土下

晴の  
土筆の  
土下

先年乃中秋  
土下

名乃や  
土下

至て佳境と近國を土筆の  
土

○有栖川様  
土

土筆の  
土

土筆の  
土







○ 甚る

魚亮

急〜日々〜山陣去乃也

偶意

全

病后のや〜日物〜

○ 福力庵の別り輝

○ 此の契乃 拙道と人翁は 昔の昔のやのや  
見の合〜平〜疎〜之門 乃乃乃 乃乃  
高とゆ〜海〜空〜の空〜余情 乃乃  
海〜毎霜 乃備〜之〜心 乃乃 乃乃 乃  
後〜乃〜乃遠〜ハ 我眉乃乃乃乃乃  
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

子亦雨〜〜〜控ぬ也

初め

紅橙窟

一掃群

庚子初冬

二月廿五日

少長〜〜 帰色 文州 梅 人

潤礎

春霞

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

氷

春雨

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

魚亮



庚子初冬

紅檀窟

一掃祥

二月廿五日

少秋くく尾色交并梅人

潤礎

春暗

如梅やう鞠乃さう丸鏡屑

氷儿

春雨

息くく日暮くく川津走乃る

魚亮

初秋

色の妻を隠し梅梅

夷柏

雛子

一ひくくト書くくを志くく

春舩

柳

昔経か海風のそく人柳

瓜下

初梅

乙七より画は若く人初をく

村徑

右七章の瓜下主人 揖うらう

初梅のころむ上を 昂息

○山家我野物語序

拾葉卷十四上

作馬あるよむむくく武高女くくあひひのい  
人からあひひくく公家の志ろくくあひひのい  
去う梅も世おらう人もくく諸君あひひのい  
はれはあひひくく武高女くくあひひのい  
るむくく夜園くくあひひのい  
あひひのい 帝王の御子くくあひひのい  
外くくあひひのい 長家くくあひひのい  
讀くく



○蓮

。蓮のふくむ新のこころを蓮の那

村徑

高野の白濁若小持りて他よりしりし極  
了東の位新の字と文の字をかしてはせん  
新の字の二也くまの字の二也くまの字の二也

○文章主人秘書院奥乃村

文章主人秘書院

村奥

。超人重稿人初賦了

正當四月二日澹溪石鯨居士  
小祥忌聖祐寺にて將布の白

。ちては心二日心印丹也

。心印丹也  
。心印丹也  
。心印丹也

泉亮

。おのころの心印丹也

。巴流道主系宮乃首途の日は倉つては計て  
。心印丹也

村徑

○おのころの心印丹也

。心印丹也  
。心印丹也  
。心印丹也

。心印丹也

。心印丹也







泥う治遊近衛多かきしりれひて哉村七

オカチしりト云高て其女も  
あしめても折之れんし程と云く  
小河旁に程の正記るれはもをわし  
カハチしりとの物もをさる  
泥の泥のふひのふのふと云  
なすり

若田氏乃内室女六十一のまじ  
しんまめをわす

本卦めと智徳松乃春

右能人ッ語に

今月廿五日時... 其六子僕に付して... 中から必きし... 石具却て...

水ゆらわさるい八重... 築もほ... 石具却て... 石徑

は佐城... 溪其乃... 越アの... 村七











新柳... 二人... 首...  
~~~~~

新柳の御筆

御

~~~~~

延七早稲... 梅

梅

~~~~~

宗匠

柏

~~~~~

香鏡

~~~~~

春中

~~~~~

村煙

下田谷 南畝 多芳亮

杖承 氷川 李 柳 佳友

石泉

○京師岩田氏... 壽

~~~~~

○信知 南畝... 乃

~~~~~

~~~~~

東... 心

~~~~~

~~~~~



○ 文苑

初秋夏去同九月 倚舟

暑甚

夕月

夕月也 舟中近 船中舟

○ 卯朔陰

書物中 友とて記す

凍色もす 舟中舟夜へ

七中 雙村位

其二

樹は心ん

舟中舟

舟中舟也 舟中舟 舟中舟

追加

舟中舟

舟中舟也 舟中舟

舟中舟 三月 舟中舟

以上 舟中舟 舟中舟

○ 首菱

村位

舟中舟 舟中舟 舟中舟 白牡丹

舟中舟 舟中舟 舟中舟 舟中舟

灌佛

舟中舟 舟中舟

舟中舟 舟中舟 舟中舟

○ 菊乃花式紙書 菊永檢校



以上 龍形 三層 満

○首菱

飛騨の神宮より下りてや 白牡丹

村伝

飛騨の神宮より下りてや 白牡丹 上後改心

灌佛

此八日麻部乃 子と法乃千代

○菊乃花式紙書一 菊永檢校、

菊愚乃し

菊永檢校

梅有らるる花枝 狐火よりし 秘曲は

弾し 正し 東の殿も

ふれ 遠く 二おと声

鳴らん 玉蓮乃人 海崎も

感らん 乃らん 乃らん

狐火や 園より 来りて 呼ぶる

七ヶ子 愛 呼ぶる

○天明元年 閏五月 瓜下之人

立儿乃り 氷儿

花乃らるる 田極時

五日 雨

心乃らるる 演車



○字五ノ朝ハ爪下ノ人ヲ立ル也  
村伝

立ル也  
一停

種ノ田毎ノ苗也  
立ル也

○放過主人ノ節ノおろし  
人カノに朽カスノ五ノ節ノ  
あつたつた花ノおろし

○六朝  
春物

福地者ノ一停ノ酒乃

おろし

○立  
村伝

耀工し初日東ノおろし

ち  
ちのむき市子  
つげ

○氷室

一停

早稲ノおろし

○立

春物







予は此の作者の志を知らず一冊の白  
くは流れて居るが如く遊して居る  
座實のこゝろに於て教養の便別  
は唯の流れて居る人々の死をなす  
取らぬ予は白甘味に於ては此の  
句の起は他流の如く我も流れて居る  
人々の死をなす予は白甘味に於ては  
予は白甘味に於ては

魚亮

冷著。 蓮の白くは流れて居るが如く遊して居る

蓮 雜草の如くは流れて居るが如く遊して居る

予は白甘味に於ては

人回りの如くは流れて居るが如く遊して居る

秋著の如くは流れて居るが如く遊して居る

偶意 稿本をなすの如くは流れて居るが如く遊して居る

右の如くは流れて居るが如く遊して居る

○余の如く

夕暮の如くは流れて居るが如く遊して居る 南歌

夕暮の如くは流れて居るが如く遊して居る







○初秋けりぬ日

桐くま相より觸る秋乃集風

瓜下

七夕

六りし秋の能夜七の乃集

左

初と云立舞の中吹りあり  
滋力あり  
清の白主人と云いし秋の能夜能曲女  
道ししぬれと云いし能いし能いし能いし

○八朝

夕朝らしく日も暮るひ乃一履

斗方栢

村徑宿白外一白の道りし  
夕朝の朝トして佳也へ  
あつてはさ味遠くあり  
たつらん百葉よ秋に履つたつ  
履に逢ふこと

朝露のびやう下に蛙あつてはさ味遠くあり  
朝露のびやう下に蛙あつてはさ味遠くあり  
東の畑は合の傍に寝身も  
清く右教陸都表古集と二首も昔の初秋の

半甲と云いしは志んハ履ハ甘夏季も

結と云いしは八朝栢も香し白ハ履也

あつてはさ味遠くあり  
あつてはさ味遠くあり

○夕朝らしく日も暮るひ乃一履



一處に舞うるもの

新夜くじやう下にのむおしにさあをさめやも  
朝霧がびやう下むら煙おしつて有る昔人よりか  
東の煙は合の煙と違ふもどおる煙 朝霧より煙  
清く右教陸 都裏古集より二首より昔の初野火の

早舟とくつらくせん 志んれつ殿ハ甘香子よしも  
結さくつらくせん 八羽梅も香く白ハハ花殿も  
奇ふありて感ふ事 舟船梅ハ梅て酒茶の  
あけ人よ芽如く梅

○夕見よはうりて日既了西の傾くは

山下

夕ほくゆかけのたき尾や花は花

感方の上

村竊と云陰のたきこと 新のたま尾のほし  
やまおく夕アと告れ新の集りよはけいれ  
やテ押く花の花をさそ先ハ譬喩の句  
又ハ詞ノくふんた云下 子あよつて 詠集  
白ハ如共とて序とてぬミ 十海をよりと佳くス  
今作ハ譬喩の句ハハあつてとてハ  
よもくたきハ花はくは下

○天中節

村を智

八羽梅の影も花も志くるを花

○八月より曉夢想

御

△松年や子花はくはくは梅乃花

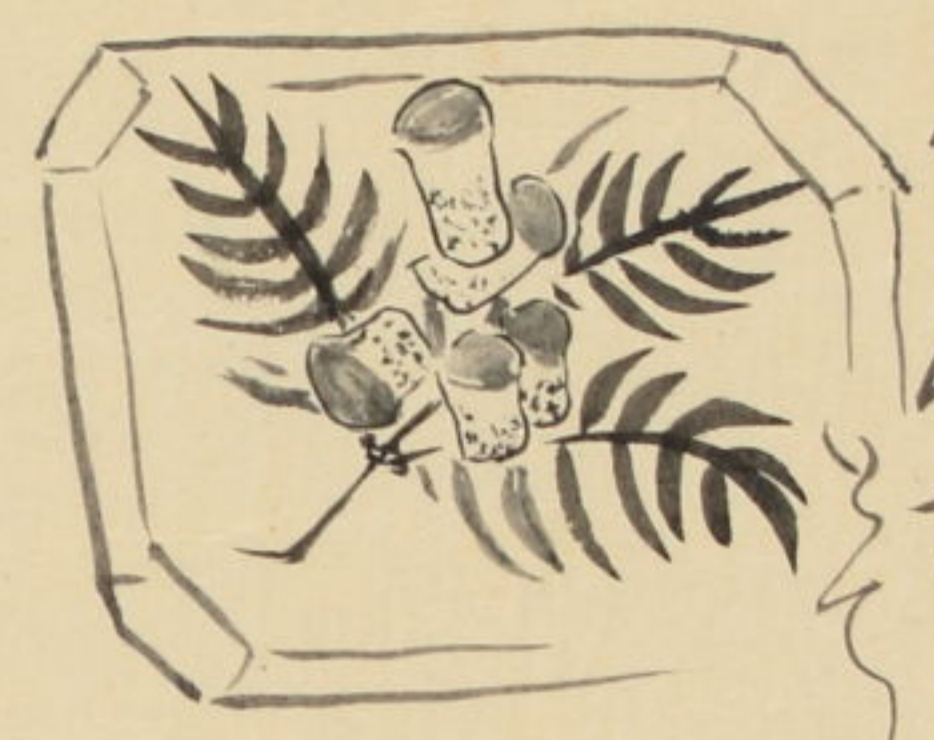
○三友琴酒詩 松竹梅 吾朝 茶誄香 雪月花



○皇都北山乃産し〜至て小キ  
松茸し其りて戯遊し

有る其推し  
男可事

則  
圖ス



○其時快復自祝

其時其香ハ法遊し極

松濤社  
浮遊

此上ハ十八カそやり其下意し  
又自祝欲あり〜而作れ其も月其  
その所其〜

其其〜根を健ハ其也其 今  
其子其が其其〜其其をて 村位

編りもや〜萱草其其 今

右松濤社需よ〜其其を咏し

下畧 右誠其其の戯言し

佛光寺派百東光寺住持し香稻菴門弟也

○仙其其の其其雨一集撰りし

其八月おて其〜其其其其

其其其其其其其其 村位



花を菊が掃きくゝおんをて村住  
編りもやと〜萱草菊奉らん今  
右ね諸社需よ〜  
口先之咏也

下畧 右誠る自の戯言也

佛光寺派百東光寺住持の香稻菴門弟也

○仙止至の麦雨一集撰りし  
廿八月おてん〜

八羽や屋の稲もさ〜  
村住

又〜  
名りや此の何侍る不二乃矣

○誄友好ら〜  
羊羹一掬

山〜  
村住

極〜  
色 淫

○送別

宿道ハ〜

カ〜

村曰  
翁金昌寺庭中ハ柳ヲ挿ハ留別也

夜掃〜



書しの画

○ 快復乃自記

あはれて根是健の彩母也 洞礎



馬岩

松蔭社

丹子菊、轉山、松蔭社にて 村後

縮れもやとて 萱草青峰 全

下畧

中秋

洞礎

名月やかくてら木草子

かたむし

右袋衣、秋 快復乃自記

○ 中 櫛 云々 匠 光

京師 亀若

かたむしや遠く木後、木草子

高巻寺あり

かたむしや遠く木後、木草子

全

○ 十 四 夜 全

洞礎

竹ノ中乃乃 如 一 扇 可 也

○ 因州鳥府の伝人一巻子角天、明元、享世五月







○一才の忠不忠ありし故に條實教の御礼

一才の忠不忠ありし故に條實教の御礼

大正九年の秋に於て

君の御心を以て

是の不忠の心を以て

法蓮院

分ちておのり末永く仕へし

子とておのり末永く仕へし

けりたかしまは子孫を授けし

仁不仁の事ありし

新千載史

此の事ありし

和らぎありし

乞ふ仁ありし

於遠忍物

此の事ありし

此の事ありし

一才の忠不忠ありし故に條實教の御礼

大正九年の秋に於て

ありし當仙洞の御授け

此の事ありし

此の事ありし

下畧

武者小路實篤の示



心ひらきし人なれん

けふの仁心者也

一節の事口傳授と云ふは後水尾院御討に  
大敵の場をさう人々の口から出た

あり當仙洞より所傳授と稱する是の由の  
由にこれをかゝるは後より福子も  
去つて久しう傳やうと云ふは所傳授と云ふ

下畧

右武者小路實隆公の示教  
書口の掛抄也

右の忠不忠仁不仁なり等也  
そんふも師説引自本より別書に記す

忠  
云火け能の足せん雪丸け

武江の野火拾始ていし時なり

有るやいして臨みこころを

麻の恩丹門の雪掃くを合は

はる寒山拾得の雪丸ト云

涼の代志玉の庭

中林文て光

不忠君解也ねるは此の

不忠のほろの酒のあふ信をり

仁  
物奴着るをいふは此の

雪丸の雪つと雪じ哀かな

心形やちての春の

訪人の信に接れ雪丸名

仁心者也

仁心者也







おのれは女に... 女位のお

村日近斗の不知夜之云上馬光景情けり

曾<sup>止</sup>路<sup>ハ</sup>守屋が化<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ハ</sup>も却<sup>ハ</sup>て一<sup>ハ</sup>車

中<sup>ハ</sup>路<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>咄<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>女<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>汽<sup>ハ</sup>雪

○漆桶造<sup>ハ</sup>相中<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>の代<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>

皇都<sup>ハ</sup>衣<sup>ハ</sup>師<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>孫<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>衣

友<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>衣<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>

細<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>子<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>衣<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>

彼<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>衣<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>

大<sup>ハ</sup>少<sup>ハ</sup>義<sup>ハ</sup>石

明<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>結<sup>ハ</sup>ぶ<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>衣<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>

村<sup>ハ</sup>位

見<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>衣<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>

初<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>衣<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>

此<sup>ハ</sup>位

前<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>衣<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>

一<sup>ハ</sup>衣<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>衣<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>

中<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>衣<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>

後<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>衣<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>

初<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>衣<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>

初<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>衣<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>











中権 至る馬光 月一享者て愚案 村名

夜と日とをあらたけ夜 夜と日とをあらたけ夜

此の月夜や如く都の人々も依りて考へ  
いふもよも若くはつらつらにけりなれば

こゝにせらるる欲臨長中  
正しくかきしるる

名月やふら雪乃 名月やふら雪乃

名月や 名月や

中権 初夜後屋 晴き星と

名月や 名月や

不知夜 近年の馬光

十名月や 十名月や

中秋 陰平深 安慮

名月や 名月や

石燈籠の月をこぼしとて

晩秋 上のりて 七五三村名

名月や 名月や

名月や 名月や

嵐雪



中秋 陰晴不定 安慮

稲うらむのこころを  
た 石燈籠の光のこころを

晩秋 上のついで  
七五三 村住

花てまの髪をくく  
たの鏡唱と記

岩峯中の湖  
山伏の鼻あはれは  
山伏の鼻あはれは  
山伏の鼻あはれは

品川二里に休や  
山伏の鼻あはれは  
山伏の鼻あはれは  
山伏の鼻あはれは

中秋 上のついで  
凡の曲 凡下

山伏の鼻あはれは  
山伏の鼻あはれは  
山伏の鼻あはれは  
山伏の鼻あはれは

厨舟や 嘆息  
山伏の鼻あはれは  
山伏の鼻あはれは  
山伏の鼻あはれは

中秋 初夜と陰を  
山伏の鼻あはれは  
山伏の鼻あはれは  
山伏の鼻あはれは

一夜の静けさ  
山伏の鼻あはれは  
山伏の鼻あはれは  
山伏の鼻あはれは

庭の掃き初め







〇〇〇 禁漫元

咲く無常ささりかたの服が

さるる花吹雪乃白くもほしき

立秋 登り舟

舟更や星の風はくす部の殊

短日

さるる曇りなるる無常の心かた

雑抄

三重切花の自叙

さるる舟の心かた

舟乃さるる 花乃さるる

舟乃さるる 七つて寝

徳田中庵 刊

右の巻舟一人 舟の心かた

〇 菊島小元 著

和洋社

菊島の心かたの舟の心かた

舟の心かた

菊島の心かたの舟の心かた

全



○十四夜

氷儿

まの宵もたたり月乃のり梅

十五夜

全

名もも人世ハ野寺の地守

十六

全

葉奢待何宵也夜乃のしう那

○追加の秋八首上あり梅の八千坊  
尾寫

全

東志四り廉すりり大いよや  
半小きと名もを立れ遠くあり

梅も也名もこりれり浮行堂

萩もも名も実合はれり中

一河も名もけりれり中

三河も名もけりれり中

四河も名もけりれり中

名も名もけりれり中

○元文喚洞乃起對わぬ

居間を廿世のよめり

光古

月乃のり梅乃のり梅

よも一休庵のよめり

全

よも一休庵のよめり



思ひは人...  
名りか...  
○之文喫洞乃起好ぬれ

居間...  
○之文喫洞乃起好ぬれ

目...  
光古

と...  
五

七...  
八千坊

お...  
八千坊

新...  
八千坊

○...  
八千坊

重田

村住

何の...  
八千坊

と...  
八千坊

加...  
八千坊

名夜

お...  
八千坊

郊外

お...  
八千坊

以...  
八千坊



○松村吉助のぬい

○4之夜 魚の鱗がき尾物に好れ月

おしるふりきり  
るしりよ侍言のよも也と云

鶏上 夜まふこしりぬ印ハカ

木槿の巻ぶ草のしり

一口に涼しき誇るんぬんが

花おほやゆきても型の角カバ

臨期違紛意

こもやまのあら先ら實ら

雑所

山田衛安画達上り

名お刻とけきと石きの花

七十一艘

村住 朱印

○4之夜

魚の鱗がき尾物に好れ月

村住

○天明九辛巳歳七月十四日

即市文、強ら愚句

春 山差我止岩



○4之夜

魚無の鱗無の尾の存乃月

村徑

○天明九辛巳歲七月十四日

即市文、浪の愚句

春 山差竅止岩

うつと探りては浪の家じ然乃都おこ

夏

夕立やと出かす城のこもす戸お

秋

桃や矢事の日はつと清すもこのか

さくらさくらも繼じ尾事お

冬

一つは例も接正あし、那

寒月や山にさるる海一舟

雜詠 墨ノ一字探り

飾かぬ古よき花乃空

七十一 村徑 朱印 碧抱







舟橋勝古也... 茶巾白... 舟橋勝古也... 茶巾白... 舟橋勝古也... 茶巾白...

九月書

松清社

新... 松清社

松清社

村徑

○... 松清社

... 松清社

... 松清社

... 松清社

... 松清社

... 松清社

... 松清社

... 松清社

... 松清社

... 松清社

... 松清社

... 松清社

... 松清社

... 松清社

... 松清社

... 松清社

... 松清社



偶成

江健

鶺鴒は他國鳥の傲哉

田家春

成英

子眠子ハ婦ヲ決月栴の花  
行路梅

解はく人並妻花可也  
若月

夜に離る相何気取  
芳子おぬ  
く道探

初蟬乃おまを長く北川を

野のなほ吹雪紅梅を川

笑はれヌキ

年因立春

是より此谷を過りて物らふ

曉意

笑はれヌキ

恋客のまのなみりゆ

成英

梅子笑



野のなほ秋の風を似せぬ川  
今

笑はれなき 二年内を春 今

夕べの日は谷を照して秋の心

曉意

成英

笑はれなき 志寒きまの心 秋の心

桃李笑

樹々の葉も秋の流るる

石英

秋の心 秋の心 秋の心

佳石

秋の心 秋の心 秋の心

春

行路の梅の香も秋の心 秋の心

芳月清風も秋の心 秋の心

如邊の心も秋の心 秋の心

歸心の心も秋の心 秋の心

秋の心 秋の心 秋の心

秋の心 秋の心 秋の心

秋の心 秋の心 秋の心

成英 秋の心 秋の心 秋の心

今 今 今 今 今 今



深井道郷別宅如相抄

伊原（連司）之末子居

水（連司）之勢（有）之存（幸）

右ノ序

幸（幸）殿（公）

一陽ノ速（西）ノ對（西）

西田（西）道（道）悦（悦）

一雪（雪）ノ勢（勢）ノ存（存）

西流

客（客）ノ勢（勢）ノ存（存）

下夏

暮秋

散葉

力（力）ノ勢（勢）ノ存（存）

樞（樞）ノ字（字）ノ探（探）

全

稻（稻）ノ勢（勢）ノ存（存）

鍛治（鍛）

林（林）ノ勢（勢）ノ存（存）

福（福）ノ勢（勢）ノ存（存）

老（老）ノ勢（勢）ノ存（存）

御食（御）ノ勢（勢）ノ存（存）

幸（幸）殿（公）

此（此）ノ勢（勢）ノ存（存）



和... 金...

林向葉流一派の... 好天...

福...

老...

御食...

李更村...

此... 京師... 礼...

○... 功... 詠... 信...

か... 心... 在...

○... 葉... 近... 文...

東... めて... や... あり...

○... 束... め... 歌... 連... 謙...

○... 上... 下... 調... ぬ... 万... 葉... 無... 心... 雨... 着... 祿... 上... 云...

○... 氷... の... 先... 後... 暑... の... 飲...

納涼ノ詩ニ出...



○懶瓚禪師と画して

此和尚の火芋と喙の火知蔵

村徑

是已御希也樹火くや秋の月

右禪師の明讀凡号

此和尚の語

勿多言領取十年高相

又至賢維希

全

一三略曰柔者德也剛者賊也

威多則反詰其身此

韓信踪布之不克終者威多也

一兵強則滅不強則折草固則裂齒

堅於舌而先之敬

○義我今康平政門威勢剛力ありて早て

項羽乃力少と撥喙噫叱嗟千人皆廢

此故

舌柔くと長く存て先折る事

常擬戒ると老聃と此心傳り

一人在無為之中

六之少卿

天地の間に在るは我君の如し

分時... 莫











えりやまごい土くまのたき

年の立春

しんがらに藤 ヒコハエ せんつが福寿

福末 旋頭目

幾くくはまのたき

ひらく羽音 前季休

梅小堂の思ふ

香ふ白初くくまのたき

けいごの思ふ仲禮丹画を抄元

東若 撫李君一掃丈 恒花又 春船又

貞良丈 右丈の原は他「仲礼名」下除て

右諸方の配の外

七十二叟 村徑

飯前平のその系を初日

歳名

正月の堂ふり 松と梅

年内立甚

甚な来し 極月の沙の海

右の世間ハ不記







○天明二年寅歳旦

雪里

釋迦孔子去々 弥勒も花乃春

新明神代の世界へ新曆の旦は神の  
花の春と悦びて存正の世に出交りて

全

風俗に電々々々 伊代に春

怒栞

風俗ノニ字ヨリ古々集の傳く

試筆

室に電々々々 伊代に春

室と電々々々 伊代に春

は詠竊考に 伊代に春  
伊代に春 伊代に春  
伊代に春 伊代に春

歳旦

歳英

先秋律例に神口影

此の古の語と云ふ 二の先ト  
三、神、字の掛合正へ 蕉翁在在の  
感慨は 村云秋、字ハ明カ  
而、和訓と云ふ秋の契後と知る人  
明白なり

亀松

初東風も海老も春の春なり

国東と福倉海老と村 冥西  
ちを、初、の、伊、春、と、春、日、又、一、統、  
く、け、海、老、の、因、り、か、る、歳、旦、の、  
錯、飾、り、眼、目、も、謂、つ、て、上、也、  
其、語、の、合、れ、り、也、

亀鶴

大黒乃乃乃乃乃乃 福壽村くや  
春水満四澤と物来不遠花大咲



梅ヲ画シテ好

成英

册見りて筆跡多し春は風

画質も少くも梅ノ字花ノ字  
拙なる作也

年内立春

左

乞る日ひ谷へ出でて初音可なり

お留のふりかへぬと強き哉  
活甘やま  
功者の業  
此中にて切て依りし  
くやの或西普通多し  
却る未始也

元旦

氷川

くちあけよ去年は板戸

アウミ下知れ非し  
併如く歳旦  
搜りし歳旦の賀儀  
わしとて熟練の上  
せいね

あつらひし餅

けりて  
乃て貴人  
好格多合

年内立春

氷川

今朝は春

有心神に  
感心

歳旦

半坊  
表白







玄雅ありき雅ありき芳中云郵千

割腹の石も尺もちりあつたは

色いさねと

右歳旦の白の字の字二つと右佳作

全まこ

中雅

昆首羯磨抄活と細工のまこと

の留火にてのよく入るるまこと

抄活とまはらひの細工と

の字を留火の正俗ををまき

花井代の調度品の春ト云

主り湯 牛の蓋置 東門

今昔の草履の今昔の草履

吉作の草履の草履の草履

千家の茶具の給ふ京具

夷和

膳月 小判 ありし

の字を至ての字を至て

一字の字を至ての字を至て

右抄活の字を至ての字を至て

左

空想の字を至ての字を至て

京師 春日 追加 羅人 御射山翁

尾 梅の牛汗

けまの字を至ての字を至て



昔々を稱卷しんもおはるる  
一さくも取立未乗る舟こころ作  
○右卷取立未乗る舟こころ作  
昔々

花をよみしはるるありたりた  
花をよみしはるるありたりた

京師 春日具 羅人 御射山翁

風やあけりきこえは梅の花 牛汗

け主人のこころをたのまぬの外  
六之節のこころをたのまぬの外

年のまゝに 撫子  
作者不名

中を教て人端をまや 春

二十日とい七よりあつたの作  
しり知てるさ七人そや師の  
と名流のこころの理い

少婦乃空をきく  
かみさか

風をよみしはるるありたりた

雨後と音あけはるるありたりた  
生花はこころをたのまぬの外  
いせいフルといふはるるありたりた  
花をよみしはるるありたりた  
撫子君入るるありたりた

昔々 實如月



如月... 行... 御... 記... 都... 卷...

一 半時... 御... 俗名... 格屋

芭... 類... 物屋也

御... 明神... 守護... 名...

早... 川... 人

自... 舟... 村... 任... 可... 持

○ 壽... 云... 名... 之... 出... 不

澹... 壽... 丈... 高

海... 呼... 古... 語... 出...

○ 山... 遊... 中... 遊

建... 歌... 花... 心

大... 井... 吹... 出...

大... 井... 全

か... 井... 全

○ 退... 船... 鳥... 見

船... 解... 人... 拾...

此... 上... 已... 廿... 二... 變...

上... 已... 廿... 二... 變...



喉の音のなるをきくは

大井河ののありし吹かす

わせきふ花は河をさるる

大井河のの音は舟をたたく

か井のの音は舟をたたく

○退朝

夕暮

船も解り人さるる世具拾ひ

此のよもあま遠くはるか

上巳廿二日と愛さるる

飛柳二人の中れはうら

江渡

寂称菴

全

倉飽日志ししに若らるる

郊外

全

修多の海の上と春種の花

は白波の海はり川はま

作者云不ぬ

此のよもあま遠くはるか

○如

全

竹葉の雨はたれし中さく守

花の風は古人の歌と伝

禁いけし

酒つら胃下りし

此のよもあま遠くはるか

果情をたたく



○正處

入生以の何の意お負

以下

是日

全

柀

長日眼赤く候へり感慨あり

感慨あり

○更衣

以下

卯お花母わさく骨折らむ相相哉

雪耐へたるありしに隔く

忽に候へり此の節を拓く

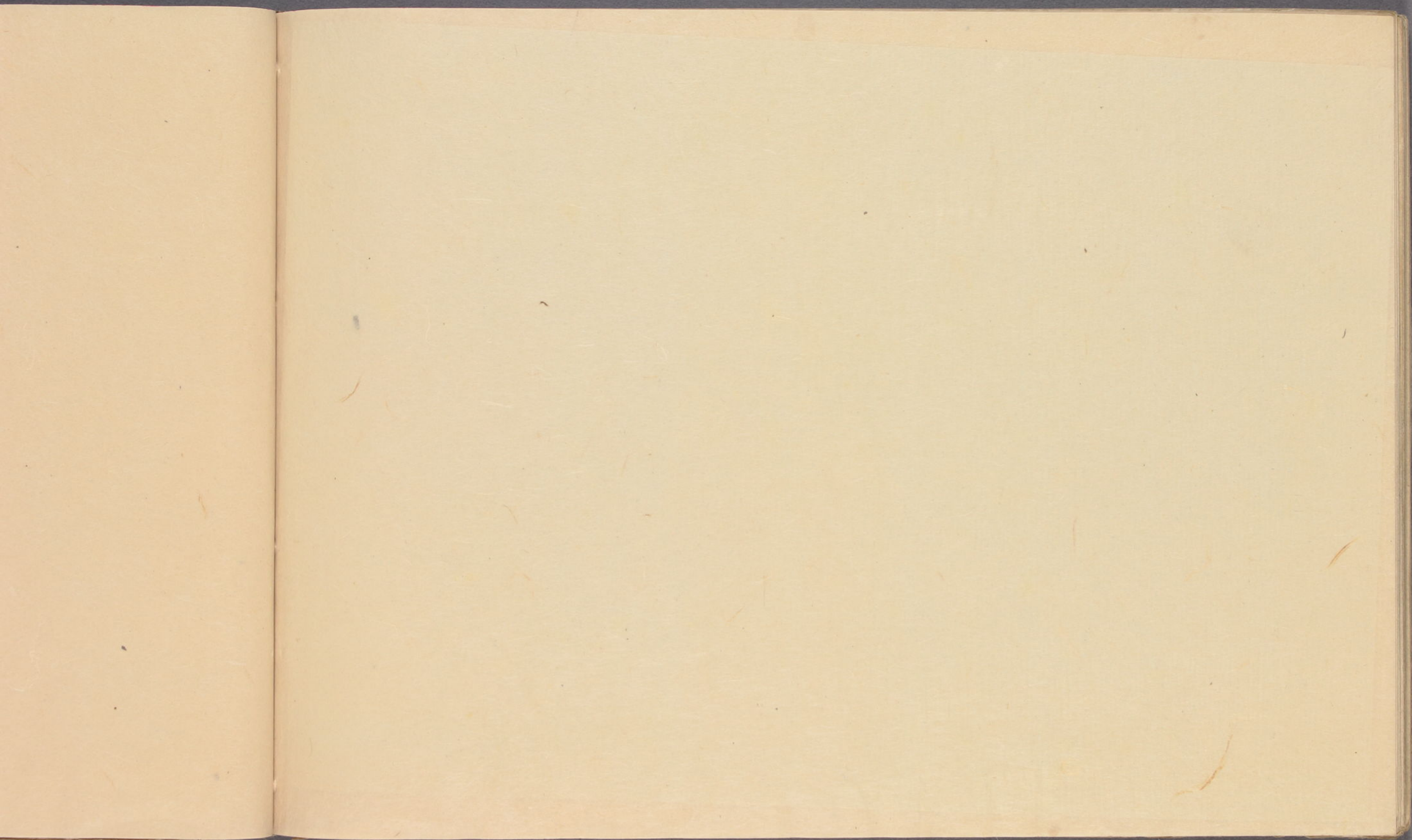
四折の折らるるを幸に候へり  
中の人好むらしと云ふ候へり  
感一する候へり

便曰





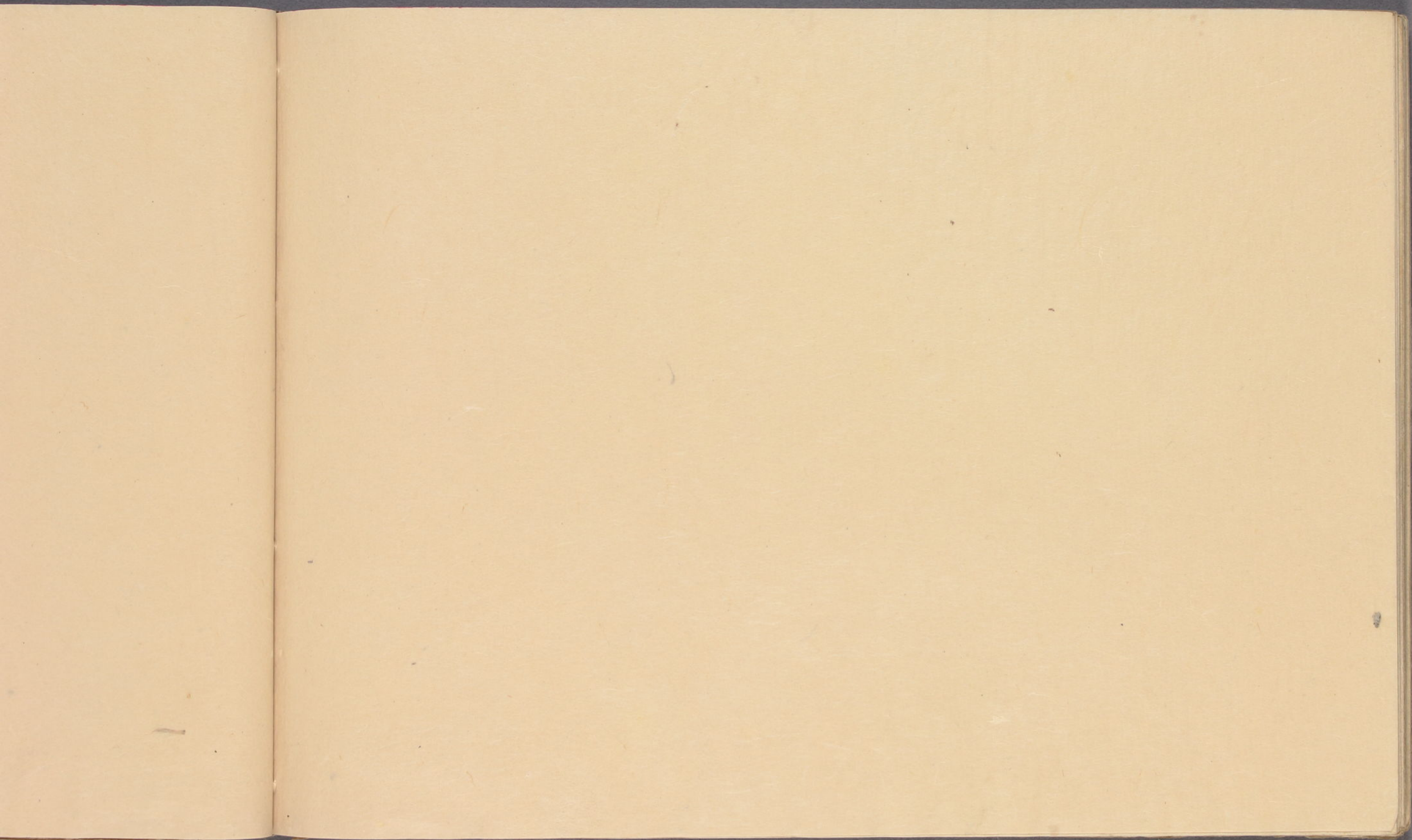














以下全て

白紙



